

Title	(随想)泌尿器科学の領域
Author(s)	石神, 襄次
Citation	泌尿器科紀要 (1958), 4(5): 253-254
Issue Date	1958-05
URL	http://hdl.handle.net/2433/111612
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

泌 尿 器 科 紀 要

第 4 卷 第 5 号

昭和33年 5 月

随 想

泌 尿 器 科 学 の 領 域

大阪医科大学教授 石 神 襄 次

『先生の御専門は？』『泌尿器科学です』『マア— どうしてそんな妙な科を専攻なさったんですの？』『いや、泌尿器科と云つても色んな方面を研究するものですよ。私なんか其の内でも性機能の問題を中心に研究しているのですが……、』『マア— よけいいやだわ』最近私の経験した某令嬢との会話である。『泌尿器科学とは泌尿、性器の生理、病理を明らかにし、此の系統の疾患の治療、特に外科的治療を研究する学問である。例えば腎結核に於て出来るだけ変化のある部分のみを摘出する様努力したり、膀胱癌では膀胱を摘出した後の尿路をどの様にすれば患者の予後に一番よいかを研究したり、又不妊の男子による原因を明らかにしてその治療方法を考えたりしているのが最近の傾向である』と説明すると、やつと『そんな事迄する学問ですか、私は又性病だけの専門医だとばかり思っていました』と答えられる。学問に貴賤はないと思つてみてもつくづく憂鬱になる気持は泌尿器科医の誰しも経験する日常の出来事であろう。一般社会の泌尿器科学への認識不足もさる事乍ら一般医師に於てさえ泌尿器科学の領域に対する理解が充分でない事は本誌編集後記にも既に記されている。然し此の現象は単に社会や一般医師の認識不足のみに責任を帰すべきでなく、我々専門医自身も充分に反省すべき点がある様に思われる。

本年の学会も会長橋原教授以下の御尽力により空前の盛会裡に終了した。然し学会盛会の陰に未だ此の様な認識不足が泌尿器科学の発達をさまたげておる事は否定出来ない。而も泌尿器科学の独立後既に数十年を経た今日尙かかる状態の残されている所に問題がある医師は勿論一般人への泌尿器科学と云うものの認識を徹底せしめる事、此の事は甚だ通俗的な事の様であつて案外忘れられている事ではなからうか。米国の泌尿器科学の某教授が印度訪問の際、米本国では泌尿器科外来を訪れる外来患者の2割にしか泌尿器科的所見が見出せないのに、印度では9割迄変化を認めたと云う話を聞いた事がある。此の事実は一面から考えると米国に於ける泌尿器科に対する一般の認識が極めて深い事を意味しているとも云い得よう。腎結核や膀胱腫瘍の患者が数多くの一般医をめぐり歩いて手術不能の状態になつてやつと我々の外来にたどりつく事の今日尙少くないのを経験する度に一層此の問題の重要性を感じずにはいられない。然し此の点は決して一朝一夕に解決出来るものではない。諸先輩の絶ゆまぬ努力によつて少くとも現在の盛大な学会に発展した我々の学問をより根深いものとする為には今後もくりかえし行わねばならぬ課題であろう。

此の点と関連して考えさせられるのはやはり我々学問の独立性に就てである。太部分の大学で泌尿器科学講座の分離が行われ、学会も又皮膚科学会と完全に分離して尙且盛大な状態を維持しておる事は誠に喜ばしい。然し、今日尙講座の独立をみない官公立大学も少

くない。特に病院関係にあつては独立して存在しているものは甚だしい。一昨々年、京都に於て開催せられた医学会総会の泌尿器科学分科会に於て新制大学院の泌尿器科学講座の独立が提唱されたが、其の後此の問題が如何なる發展を見ておるかに就ては私には解らない。勿論、公私立病院等では経済的独立性と云つた事が大きな問題となつてゐる事も否定出来ない。然し最近屢々辺境の病院等で泌尿器科専門医を求める声を耳にするにつけ、矢張り上述の一般への認識と云う事が根本的な課題と考えられる。

次は此等の問題と又関連するが泌尿器科学の研究の領域に就てである。泌尿器科学が其の發展段階に於て外科の一分科として發展し又それが此の学問の重要な部門である事は万人の認める所である。然し我々が此の一分科としての狭い範囲に閉ぢこもつてゐる限り、より以上の飛躍は望み得ない。少くとも泌尿、性器の病理の解明、疾患の治療を目的とする以上、性機能、妊孕其他所謂 *Sexual science* としての追求も我々に与えられた課題の一つではなからうか。遺憾乍ら現在迄我々の領域に於ける此の方面の研究は極めて微々たるものであつた。在来の教科書を通読しても極めて僅かの部分が此の方面の説明にさかれているに過ぎない。とかく性機能の研究は今迄我々専門医仲間では邪道と迄は云わずとも過少価値されていた事は事実である。従つて特に *Sexual science* の研究は一部の生物学者、心理学者の手に委ねられ、医学的には甚だ偏つた發展を示している事は周知の通りである。此の方面の訴えを以て来院する者が我々外来患者の相当部分を占め乍ら、何等其他覚的所見の認められないと云う理由のみで寂しく去つて行く事實は我々専門医が今一度謙虚に反省すべき点と思われる。最近内分泌学の異常な發達に伴い此の方面への関心が我々の内にも急速にたかまりつつある事は喜びに絶えない。今回の総会に於ても性器關係の演題が甚だ多数を占めていた事は座長落合助教授が特別発言で指摘された通りである。此の現象は尙此の方面に我々としてなすべき未解決の問題が残されている事を示すものとも云える。此の意味で内分泌学会、不妊学会等に於て、生化学者、生物学者等との交流が多くなつた事も意味のある事である。此等の機会によつて我々の視野も拡がり又多くの新知識が与えられる訳で、我々とは全く無關係に見える生物現象から案外重要な示唆の与えられる事も少くない。此の様な發展のし方が果して泌尿器科学の邪道であるか否かは別として我々の進むべき一つの方角である事には異論はあるまいと思われる。そしてかかる多角的にも見える發展が泌尿器科学の社会的認識を深める上に少からず役立つとも考えられる。然し問題は尙処女地であり又その前途は甚だ困難である。器質的疾患の解明より更に進んで機能的疾患の解明へ發展する事は現代医学の最も苦しんでいる課題であり且悲願であるが、それは *Sexual science* に於て特にその典型的状態が認められるからである。然し此の壁を打ち破つてこそ泌尿器科学が社会より名実共に最も尊敬される医学の一分科としての榮譽を与えられるものではあるまいか。